

北上市P連会報

第34号

一発行日一
平成24年
(2012年)
12月13日

発行：北上市PTA連合会

企画編集：広報委員会

印刷：北上アビリティセンター



平成23年3月11日、東北太平洋沖地震による大津波が我が岩手県内沿岸部を襲い、街は破壊され、多くの尊い命が失われました。

あれから1年半以上が経った今、まだまだ復興は遅々として進まず、多くの方が仮設住宅住まいを強いられ、そして仮設の学校で学ばなければならない子供たちも多くいます。

そこで、沿岸部の復興のために内陸部に住まう我々に出来ることは何か、保護者及び教職員に加えて子供たちと共に知恵を出し合って末永い支援活動を続けなければなりません。一人一人の力はとても小さいものですが、その小さな力を結集して、沿岸の復興につなげられたらと思います。

目次	☆特集	復興 P 2	☆報告3	東北P連山形大会 P 6
	☆特集	和賀西小学校「創立20周年」 P 4	☆報告4	県PTA紫波大会 P 6
	☆報告1	P会長・校長・副校長交流研修会 P 4	☆報告5	市P連母親委員会 P 7
	☆報告2	市P連研修大会 P 5	☆市P連会長挨拶・編集後記 P 8	





被災した鵜住居小学校

—— 特 集 ——

復興

鵜住居小学校訪問

9月4日(火)、北上市内の小学校5校(黒西、黒東、黒北、和賀東、江釣子)の教職員、児童代表、PTA役員の見学40名で釜石市にある鵜住居小学校へ訪問し、各学校で集めた募金、メッセージなどを届けてきました。私自身、震災後、沿岸へ足を運ぶのは2回目。内心ドキドキしながらの訪問でした。

まずは、鵜住居地域振興協議会の浦山さん、両石町復興協議会の瀬戸さんの案内で被災した鵜住居小学校と釜石東中学校をバスから視察させていただきました。

学校は見るも無残な状態でした(震災時は3階まで津波が来たそうです)。津波の恐ろしさを改めて感じた瞬間でした。

そして、「釜石の奇跡」と言われている鵜住居小学校、釜石東中学校の子供たちの避難の様子なども聞くことができました。子供たちは、地震がいつもより強い揺れだったため、津波の危険を感じ、咄嗟の判断でいつもの避難場所より高い所へ避難し、全員が助かったとのこと。「自分の命は自分で守る」・・・地域全体の取り組みがみんなの命を守ることに繋がったとのことでした。日ごろからの防災教育や防災訓練の重要性を感じさせられました。

じさせられました。

その後、海岸沿いを視察し、次は、鵜住居小学校訪問。

小学校に着くと、坂下校長先生を始め、たくさんの先生方が出迎えてくださいました。鵜住居小学校は震災後、市内の小佐野小学校、双葉小学校に間借りする形で学校がスタート。そして、今年2月に仮校舎が完成し、待ちに待った全校生徒での再スタートを切ったばかりとのことでした。とにかく、子供たちは全校生徒が揃って通える日を楽しみにしていたようで、今はとても生き生きと学校生活を送っているとのことでした。

仮校舎は、暑さ寒さが厳しいプレハブで、校庭や体育館は中学校と共有、プールは隣の学校のプールを借りる・・・などなど、まだまだ元通りの小学校生活とまではいかない部分もあり、子供たちにとって不便なこともたくさんあるようです。

少しでも子供たちが楽しい学校生活を送れるよう、これからも横軸連携を継続し、長く支援していかなければならないと思いました。



復興

東日本大震災より一年半以上が経過した。各地区の復興の様子は、テレビや新聞の報道で知ることが出来る。食品関係、水産関係、学校などは、仮設のまま動いているが、まだまだ復興にはほど遠い感じだ。私自身も、3学年の生徒に同行させてもらい、十月に釜石へボランティアで行って来た。町はそれぞれに動いているが、津波の被害を受けた地域では、手つかずの状態が目についた。実際に見れば、津波の恐ろしさ、自然の力の脅威を感じる。三陸鉄道の線路は途中で切断されたままだし、津波の被害を受けた家屋は、土台だけが残り、今では草や花だけが咲いていた。あちらこちらでがれきの山を目にする。

私達が行ったボランティアは、砂浜の流木やゴミ拾いだっただけ。生徒達は頑張ってくれて、あっという間に取り除かれた。やはり、今、復興に向けて必要なのは、一人一人の手だと思ふ。そして、何より若者の力だ。

現地の子どもの学校生活も、仮設の学校で行われ、校庭なども満足に使える状態ではないが、その不便な中でもクラブや勉強に励んでおり、新人戦などでは沿岸地域の活躍が多くみられ、力強さを感じる。

岩手が本当に復興していくまで何年もかかると思うし、まだまだ皆の支援の輪が必要だと思ふ。そして皆の温かい心、温かい愛が必要だと感じる。一人では何もできなくても、皆が集まれば、大きな力となる。心の傷は簡単に癒えることはないと思うが、希望の光を灯してあげることが出来るのではないかな。生きている限り、多くの悲哀や喪失にさいなまれるのは人間の宿命だと思うが、それでも人間は何度も立ち上がってきたし、その力は確実にあるはずだ。今の若い世代の人は少なからず復興に携わるだろう。その時には、精一杯の力を発揮してほしい。「釜石の奇跡」などを教訓にして、一人一人が日々の生活を送ること。この先も災害の記憶や経験を世代を超えて伝えていくことが、大切ではないだろうか。

絶対に風化させないように。

～子どもたちは未来～

昨年、創立50周年を迎えた北上市立南中学校。記念事業の一環でお招きしたのは、陸前高田市で活動を行っている「氷上太鼓」。平成元年から毎年、陸前高田市で開催する“全国太鼓フェスティバル”は多くのお客様が集う有名なお祭り。東日本大震災によって、団員の方数名が犠牲になりましたとのお話を会長の鈴木さんから伺いました。そんな中、記念事業に参加して頂き響かせた太鼓の『鼓動』は南中生たちに新たな想いと絆を与え響かせてくれました。

昨年と今年の文化祭ではモザイクアートに“高田の一本松”を採用。夏休みを利用し、沿岸でボランティア活動を行う生徒たちもいました。その活動を受けて、私たち大人は何が出来るかを改めて考えました。「復興」との言葉通り、以前の状態に戻す事とはいえ「全

て」元に戻るとは実質言い難い部分もあります。そして気にしながらも行動に移せてないのが現状です。



先日、本会報の「復興」に思案している所で素敵な一冊の本と出会いました。その本のタイトルは「PRAY FOR JAPAN」。ページを開くたびに涙が止まらず、私はいつしか号泣していました。そして人の心の温かさ、人の力の偉大さを感じました。その中から数点を御紹介し結びにします。「私たちが」そして「私たちにしか」出来ない復興が、必ずあります。



【ありがとう】—— 駅員さんに「昨日一生懸命電車を走らせてくれてありがとう」って言ってる小さい子たちを見た。駅員さん泣いてた。俺は号泣してた。

【大丈夫、未来あるよ】—— 避難所でおじいさんが「これからどうなるんだろう」と漏らしたとき、横に居た高校生ぐらいの男の子が「大丈夫、大人になったら僕らが絶対元に戻ります」って背中さすって言ってたらしい。大丈夫、未来あるよ。

【私から】—— 誰かに頑張ってくれと願うなら、100回『頑張れ』と言うよりも、自分が1回頑張った方が伝わる。私たちが、頑張ろう。

【未来を引き継いで】—— 中三の少年と父親が自転車で、知り合いたちの安否確認のために移動していた。たぶん震災前は、少年も父に繰り返し反抗していたのだろう。だが、父は父として力強く、少年は、そんな父を慕っていた。苦難の中では大人の経験が頼りになる。被災地の父よ、母よ。子どもたちに未来を引き継いで欲しい。

—— 特 集 ——

和賀西小学校創立 20周年

～全校姥杉ハイキング～



北上市立和賀西小学校は、北上市の最西端に位置し、西に奥羽の山々が迫りその中を和賀川が流れ、豊かな自然に囲まれた小学校です。

本校は平成4年4月に、当時の横川目小学校、山口小学校、岩沢小学校、仙人小学校の4校が統合し「北上市立和賀西小学校」が誕生しました。その歴史は古く横川目小学校においては明治6年の開校となっています。統合当初は291名の児童でスタートし、「わにっ子（和賀西小の子供たち）」たちは勉学やスポーツに励み、現在まで20年間で682名の卒業生を輩出しています。

創立20周年の記念事業として、PTA役員と先生方との検討を重ねてきました。当初は記念式典の開催も検討しましたが、子供たちの思い出に残ることをしたいという思いを第一に検討してきました。その結果、「きたかみ巨木の会」の方々にガイドをお願いし、地域の自然や歴史を学ぶとともに地域の方たちと触れ合う事で、長い歴史のなか風雪に耐えてきた仙人姥杉のように、いかなる試練にも負けない豊かな心と体を持った「わにっ子」に育ってもらいたいという願いを込めて、地域の銘木「全校姥杉ハイキング」を創立20周年の記念事業としました。

記念事業当日の10月5日は94名の「わにっ子」、保護者21名、教職員12名、巨木の会4名の計131名での開催となりました。学校から2回に分けてバスで登山口まで移動し、登山口からおよそ2kmの山道を1,2,6年生と3,4,5年生の2つのグループに分かれ標高882.2mの尾根上にある仙人姥杉を目指しました。

1,2,6年生のグループでは1,2年生の間に6年生が入り、急な坂道や険しい場所などでは1,2年生をサポートしながら登りました。6年生は1,2年生を見守りながら、1,2年生は6年生に感謝しながら助け合い

の精神で登山を行いました。

また、3,4,5年生のグループは出発時には天気も良かったのが、3分の1ほど登ったところから雷が鳴り始め大粒の雨が降り出し大荒れの天気となりました。普段は元気のいい子供たちも大荒れの天気には口数も少なくなりました。そんな中にあっても学年の垣根を越えてお互いが声をかけ合いながら誰ひとり足を止める事なくしっかりと足取りで山道を登り、標高差300mの道程を全員無事に踏破することが出来ました。

山頂では雨も上がり巨木の会会長の平賀会長から、推定樹齡900年、樹高30m、幹周11.5mなどの説明を受けました。子供たちはそれぞれに達成感を感じたり姥杉を前に壮大なパワーを感じたりと、これからの決意を新たに全員無事帰路につきました。

地域の歴史に触れ、地域の温かい支えの下で歴史を刻んできた和賀西小学校です。決して楽ではなかった今回の「全校姥杉ハイキング」の経験を生かし、「わにっ子」の更なる飛躍を誓いました。



平成24年度 PTA会長・校長・副校長交流研修会

9月1日（土）15時30分よりホテルシティプラザ北上（銀河の間）に於いて例年通り「平成24年度PTA会長・校長・副校長交流研修会」が開催されました。講師には秋田大学教育文化学部教授の浦野弘先生をお迎えし、ご講演をいただきました。

ご講演の演題「学力向上と学校・家庭・地域の連携」

1964年（昭和39年）に行われた全国学力調査で、秋田県は全国平均に達していなかったが、2007年（平

成19年）には小中学校ともに全国トップクラスとなった。その原因について浦野先生は「学校の授業に集中する、家で予習復習をしっかりと、早寝早起き、毎日朝食を食べるなど、かつての日本では当たり前だった学習・生活の環境が全国的に失われた一方、秋田県では変わらなかったこと」と説明。「秋田が伸びたというよりは、他が落ちていった」と話した。

また浦野先生は、家庭での学習時間は最低、学年×10分間（小学校6年生なら60分間）が必要として、

夕食の準備中に食卓で宿題をさせることなどを勧めた。今は大学生となっている子どもたちを対象にかつて行った調査では、世界の国々の中で日本は、宿題や家の手伝いをする時間は最下位や下から2位なのに対し、テレビを見る時間は第1位だった。

浦野先生はこの結果を示しつつ、「こうした子たちがこれから日本を背負っていく。日本の将来が大変であることが如実に現れている」と危機感をあらわにした。また近年の日本はアメリカの状況に似て、下位の子たちの成績が一層下がっている状況もグラフで説明し、危うさを指摘していた。また、地域の情報も調べてくださり北上市の資料も講評していただきました。

浦野先生の講演を聴いて、教師、生徒ともに満足するための、魅力的な授業づくりと展開で学力向上につながることや、子供が授業や生活の中で活躍できる場面をつくる（家庭でも）ことが大事だということを知っていただいた。

浦野 弘先生 プロフィール



1951年、東京都に生まれる。秋田大学教育文化学部教授。1974年、東京学芸大学卒業。1976年、東京学芸大学大学院修了。東京都の公立中学校教員、東京学芸大学助手を経て、1992年、秋田大学助教授、1997年、教授に就任。秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター学習環境研究部門に所属。教員の力量形成に関する研究、授業研究方法の開発研究、新情報技術の教育利用に関する研究、理科のカリキュラム・教材の開発研究を行う。

<著書> ○「秋田の子供はなぜ塾に行かずに成績がいいのか」講談社 2009年6月 ○「パソコンで見る気象入門」（共著）講談社 1993年2月 ○「教育実習ハンドブック」（共著）ぎょうせい 1993年10月

平成24年度北上市PTA連合会研修大会

平成24年度北上市PTA連合会研修大会が、講師に役重眞喜子氏をお迎えし、「人が育つ地域、育たない地域～岩手で暮らした20年が教えてくれたこと～」と題して、11月3日、さくらホール（小ホール）で開催され、市内小中学校から多くの参加者が出席しました。



役重氏は、東京大学法学部を卒業後、平成元年農林水産省に入省しました。平成2年、本県東和町で一ヶ月の農家研修の中で、自然や生き物に触れられる生活に魅力を感じていたことから、東和町に移住することを決意しました。

方言や都会生活と農村の生活スタイルのギャップに苦労しながらも、支え合って生きることの大切さを自分の体験を通してお話いただきました。

農村と都会の社会の大きな違いは、人と人の接面が広く、かかわりが深いこと。そして職業人として自分と家庭での自分が地域社会の中で接近している「職住接近」。都会では家と職場は分断されており、人と人とのつながりは薄い。

役所職員・農家の嫁・母親・など忙しい生活の中、ある日大病を患った。そして「思い上がっていた自分」、「相互扶助のシステム」、「生きていくためにはプライバシーよりは連携が大切」、「身近に生死に接触することで生きる事の意味を実感する機会があること」、「都会の『便利』が生む『孤独』」など、多くを学ぶことができた。

農村社会では、プライバシーがない反面、相互扶助の仕組みがあり、社会問題を解決する力になっている。3・11では、市防災計画の見直し強化と、自主防災組織の育成・支援を見直すことになるが、個人情報保護法のもと、プライバシー意識の変化が、対応を難しくしている。

花巻市では、都市内分権を進め、行政と地区コミュニティの役割分担を明確にしようと考えているが、本

当は割り切れない、ファジーな領域がある。この領域は、農村地域では、うまくやってくれた領域でもある。学校は地域を写す「鏡」であり、同じような問題が出ている。

学校の責任分野・地域家庭の守備範囲がある一方、その中間にファジーな領域がある。「子どもが通学路で悪さをする。」これはどちらの領域か？役割の押し付け合いではうまくいかない。

東和町型ケアチームでは、子どもや家庭を連携して支える仕組みがあった。



教育は、「学び」であり、「学ぶ」は「まねぶ（まねる）」ことである。郷土芸能伝承にはその力がある。「まねぶ」相手との信頼関係や「まねぶ」場所の設定が大切である。教育はまた、危機管理が大切であり、危機管理は初動が大事である。子育てでも同じで、子どもの一大事に、初めにどう対処するかが大切である。

過疎地での子育ては、友達も遠く、急病でかけつけるのも遠くて大変。全員が役員（スポ少・部活、PTA）となる。近所の助け、保育所が頼みとなる。

先生のお話を通して、人と人とのつながりが、地域社会の課題解決に不可欠であると同様に、教育や子育ての課題解決には、学校が家庭やPTAはもちろん、地域とも連携することの大切さを学ぶ講演でした。

第44回東北ブロック研究大会 酒田・飽海大会

今年度の第44回東北ブロック研究大会は山形県酒田市で9月8・9日に行われました。北上市PTA連合会からは、8名の参加でした。

今年の大会主題は、「築こう 笑顔溢れる未来を 育もう 公益の心を つなごう 家庭・学校・地域を」をテーマに酒田市民会館「希望ホール」で分科会・アトラクション・全体会がありました。記念講演は「グローバルな時代だから日本語を」を演題に、元日本テレビアナウンサー石川牧子（現日テレ学院 学院長）さんのお話でした。今の若い人達は、大人とのコミュニケーションが下手で話し相手に上手く話を伝える事が出来ない、さ行が言えない人が多くなっている、パソコンやネット社会が進むせいか、漢字を書く事が出来ないなど、現代の人達に足りないことを話されました。



分科会では、「参加意識と実践力を高める研修活動と広報活動」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。



アトラクションでは、山形県酒田市の「松原北前太鼓サークル・松原小北前クラブ」による、北前太鼓を演奏してくれました。



8日の夜、岩手県PTAの単P会長と、岩手県PTA連合会の執行部の方々も交えての懇親会が行われました。



第40回岩手県PTA研究大会 紫波大会

9月15日（土）に、第40回岩手県PTA研究大会紫波大会が「歴史とフルーツの里から次代に伝えたい美しく豊かな岩手の心」を、大会テーマに開催されました。

午前中は分科会ごとに7会場に分かれて「組織運営」「研修活動」「健全育成」「家庭と小学校教育」「家庭と中学校教育」「家庭教育セミナー」「特別課題」のテーマ毎に研修を行いました。

第2分科会（研修活動）では「みんなで音読を楽しみましょう」と題して、ことせ音読教室の尾形さゆり、佐藤久美子の両氏を講師に、参加型の研修会を体験しました。参加者全員で「けっくう けっくう きゃきゅ きよ、…」と群読のトレーニング行ったり、輪読、チェック音読、早読等色々な音読トレーニングを体験することが出来ました。



第3分科会（健全育成）では、最初に盛岡大学文学部非常勤講師、野口晃男氏の基調講演がありました。

野口氏は、親や地域がどのような考えで子育てをしているかということで、日常での具体的な場面を提示してお話されました。たとえば、「親が、近所の人に挨拶しないと子供はどうなるか」、「子供の前で先生の悪口を言うと、どうなるか」、答えは、「挨拶をしない子供」「先生を信用しない子供」になるそうです。子供は親や地域の大人を手本にして育つ。だから親は、子供の良い手本にならなくてはならない。また、「失敗しない方

法より、失敗してもくじけない心を育てましょう」「主人公の輝きも良いが、脇役でも幸せと感じる心を持っている方がもっと素敵」と言う心の育て方を、身振り手振り体験談とお話になられました。

その後、3名のパネリストの方々が「地域の絆をはぐくむ、健全育成 ～地域に根差した活動実践～」をテーマに地域の活動を話されました。どの方々も、子供、地域のために芸能活動、おやじの会などを立ち上げ、苦労しながらそれを喜びに変えて今まで活動していることなどのお話をされました。



午後は会場を田園ホールに移し、全体会が開催されました。最初に出迎えてくれたのは、紫波総合高等学校郷土芸能部による見事な「船久保さんさ踊り」でした。開会行事には、大勢のご来賓をお招きし盛大に開催されました。

記念講演では、(株)八木澤商店代表取締役の河野通洋氏から、「地域の財産である子供たちをいかに地元に残すか」を演題に、震災での体験談等も織り交ぜた貴重なお話をお聴きする事が出来ました。

震災による津波で自社も被災した中、「地域の復興無しには会社の復興はありえない」と、地域復興、会社再建の為奔走し、「復興は子供たちの手で」と社員の雇用を維持しながら新卒者の採用も続ける等、すばらしい行動力と信念に感動させられた90分間でした。

今年は復興元年ということもあり、地域の絆、これからの子供たちの未来を今まで以上に考えさせられる研究大会でした。



平成 24 年度北上市 P T A 連合会母親委員会の活動

今年度の母親委員会は、担当の飯豊小学校が事務局となり、市内の9中学校区から選出された9名の母親委員の皆さんと共にスタートしました。

(今年度の活動紹介)

- ・学校給食施設の研修と試食会
9月4日 於：北部給食センター
- ・サトウハチロー記念「おかあさんの詩」
全国コンクール実行委員
表彰式11月17日 於：さくらホール
- ・食育研修会 12月予定 於：さん食亭
- ・北上市食育推進協議会
- ・和賀地区 PTA 連絡協議会との連携

☆ 学校給食施設の研修と試食会

北上市には三つの給食センターがあります。今年度は、昭和43年開設、三つの中で一番歴史のある北部給食センターにお邪魔しました。

2階の窓から見下ろすと、職員の方々が大きな釜をかき混ぜていました。「蒸気で暑そう・・・」正直な感想です。終始「すごいねー」の言葉しか出ません。

今回一番興味を持ったのは、放射性物質を測定する機械です。今年度から、安全性を確認し不安を和らげることを目的に、学校給食で使用する食材と調理後の給食のサンプリング測定を定期的に行っているそうです。



この日のメニューは、鯖のみりん焼きと田舎煮、あさりの味噌汁でした。

衛生管理のもと、安全でおいしい給食を提供してくださっていることに感謝です。

夏休みや冬休みになると、給食の有難さが身に沁み入るんですね！

☆第16回サトウハチロー記念「おかあさんの詩」 全国コンクール

昨年度まであった一般の部が無くなり、今年度は応募総数3,944編、北上市からは小学生1,099編、中学生653編の応募がありました。

そして市内の小学生1名が優秀賞を受賞し、8名が入賞しました。

母親委員会では、さくらホールで行われる表彰式でのお手伝いをしていますが、そこに至るまで約8ヶ月間にも及ぶ大事業であること、海外からの応募があること等、驚きの連続でした。

北上市にサトウハチロー記念館を移転した経緯なども調べてみるとおもしろいですよ！



☆ 食育研修会

今年度はさん食亭さんにお邪魔して、社長さんのお話を聞かせていただきます。

自家農園で栽培している野菜を使っているさん食亭さんですから、地産地消のお話などが聞けるでしょうか・・・。

地域経済の活性化、地域への愛着にもつながる地域生産地域消費・・・大切なことですね。さん食亭のお食事楽しみです！

母親委員会はまさに《おいしい委員会》です。
 子供たちの成長に欠かせない『食』について、ためになるお話を聞かせていただいたり、自身を振り返る機会をいただいたり、母親の立場で気楽な気持ちで貴

重な経験をたくさんさせていただいています。今後はここで得たものをPTA活動に反映させて行く事が大事であると感じています。

ごあいさつ

親として子供に向き合う



北上市 PTA 連合会
 会長 中野 義明
 (北上中学校 PTA 会長)

平成 24 年度、北上市 PTA 連合会の会長を務めております、北上中学校 PTA 会長の中野義明です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今年度の北上市 PTA 連合会の活動も終盤に差し掛かり、集大成の時期となりましたが、各学校 PTA 会長の皆様には、年度当初より何かとご尽力をいただき、誠にありがとうございます。また、それぞれの各学校での PTA 活動を、役員・会員の皆様と積極的に展開していることに敬意を表したいと思います。

今、子供たちを取り巻く環境は、集団登校での自動車事故、社会問題化しているいじめ問題と様々な事件事故が身の回りに起きています。さらにはインターネットによる有害サイトの氾濫、またはメールによる誹謗中傷などの書き込み、そしてネットゲームなどによる多額の支払い請求など、あげたらきりがありません。このように日常化しております。子供たちにとっては当然のことながら心身ともに悪影響を及ぼすものであります。

しかしながら、親としてこのような様々な問題に真摯に取り組んでいかねばなりません。まさに今、私たち親の力が試される時ではないでしょうか。子供と信頼関係を築き、顔を突き合わせ、コミュニケーションを取り、互いの心を通わせることが必要だと思います。仕事の忙しさに没頭するあまり、知らないうちに問題を抱えてしまっているのかもしれませんが、もちろん全てにおいて構う、知る必要はないでしょうが、何か様子が変だ、あるいは悩みがありそうだというときは、気づいてあげられるだけの心配りが必要なのではないでしょうか。時として子供たちは、気づいてほしいシグナルを発しているときがあると思います。

それから、家族でどうしても対応しきれないときは迷わず、PTA 仲間、学校の先生、あるいは地域の方などに相談してみることも大切な解決方法だと思います。他人に分かるはずがないと思わず、同じ境遇で分かり合える仲間は必ずいるものです。そういった方々に助けられるのも、PTA を通じて経験を持っているからです。ぜひためらわずそういったときには行動してください。

子供を立派な成人にすることが親の責任です。そこに行くまでの道のりにおいて様々な困難を乗り越えていかなければなりません。あらゆる問題は決して他人事ではありません。ぜひとも常に自分のことと置き換えて日頃から対処してほしいと思います。ここに皆さんに語りかけたことは、実は自分自身が一番しなければならぬことだと思っています。

編集 後記

昨年度の特集「大震災」を受け、今年度は「復興」を特集記事としました。いまだ復旧もままならない沿岸地域を見ると、あらためて被害の規模の大きさがうかがわれます。しかしながら少しずつでも復旧されている事も実感しました。

これから私達に何が出来るのか。子供と話題にしてみてもいかがでしょうか。

今年度も広報委員全員に記事を分担し、みんなでつくりあげました。ご協力頂きました皆様と、無事に発行出来たことに感謝申し上げます。ありがとうございます。是非多くの皆様に読んで頂きたいと思っております。

平成 24 年度北上市 P T A 連合会広報委員会

<委員 長>	和賀東小	高橋 永男
<副委員長>	鬼柳小	高橋 晃大
<委 員>	黒沢尻東小	菅原 浩一
	黒沢尻西小	八重樫 敏
	黒岩小	昆 精寿
	口内小	昆野 将之
	江釣子小	佐藤 洋子
	笠松小	狩野 弘之
	上野中	高橋 光明
	北上北中	小田島弘子
	北上南中	三田 雅崇
	和賀東中	高橋 穩至

市P連ブログもご覧下さい。 <http://blog.kitakamipta.net/>

